実践交流
小学国語
―全学年―

子どもの学ぶ力を育てるために
―文学作品における書き込みの内容と方法―

大阪樟蔭女子大学　山本　光男

一　はじめに

最近、小学校の校内研究会に招かれる機会が多い。そんな中で、今日の授業は、見ていてしんどい・重たい授業だなと感じることがある。それは、授業が教師と子どものやりとりに終始していて、一問一答式の指導形態になっていることが多い場合である。授業をしている教師自身もそのしんどさを感じていて、改善策を模索していることが多い。

先日訪問した学校も、学校全体で、「文学作品で、読む力を高める指導法の研究」というテーマで授業改善に取り組んでいた。授業を見た後の研究協議で、私が指導助言をしたことは、次のようなことである。

どの学年においても、子ども一人一人に、文学作品の読み取り方が身に付いているようになれば、教師と子どもの一問一答式の学習展開にならないで、子ども自身が相互に意見交流をしながら、読み進めていくことになる。そのためには、まずは学校全体で、読み取り方をしっかり子どもに教えたり気付かせたりしていくことが大切である。学び方の学習を学年のはじめに徹底して指導し、どの学年もそのやり方を共通理解をし、共通実践していくようにすればいい。次に述べる「書き込み」についても、学校としてその「書き込み」のモデルを、低・中・高学年別にプリントしておけば、すべての教師が系統的に指導でき、また、だれがどの学年を持っても一貫した考え方で読み取りにおける「書き込み」指導ができるようになる。

二　書き込みについて

文学作品の授業でよく行われる方法として、意見交流をする前に、文章の書き込みを子どもたちにさせることがある。それは、子ども一人一人がまず自力で想像的に文章を読み取り、その後、一人一人の読み取りをもとに全体で話し合いをするという学習展開を意図してのことであると思われる。私自身も、書き込みについては子どもが自分の読みを確立していくうえで大事な学習であるととらえている。しかし、実際の授業で、子どもの書き込みをしたものを見てみると、大事なところに書き込みがされていなかったり、子どもの想像力が十分発揮されていなかったりするものが多い。どの箇所にどんなことを書き込んでいけばよいか、そのことを十分理解していないことが大きな要因である。そこで、子ども一人一人に、次のようにして書き込みの方法や内容を指導してはどうだろう。

1　書き込む箇所（『大造じいさんとがん』を例にして）

○文末の言葉

文学作品は、文末の言葉に登場人物の行動や心情が描かれ、それらの変化が描かれていることが多い。文末の言葉は、品詞で言えば、動詞や形容動詞、副詞などの用言が多いが、それらの言葉に書き込みを入れる。

（例）「いまいましく思っていました。」
○登場人物の心情をよく表している言葉
（例）「むねをわくわくさせながら」
○情景描写で、登場人物の心情が想像できる言葉
（例）「東の空が真っ赤にもえて、朝が…」
○文末表現のうち、文章全体でみればあまり使われていない言葉。
（例）「（じゅうを下ろして）しまいました」
○心情がよく分かる会話文
（例）「ううむ！」「ううん」
○会話文の後の、話し手の様子や心情が分かる地の文
（例）「大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながら、にっこりとしました。」
○時間の経過がわかる言葉
（例）「今年も」「その翌年も」「今年もまた」

2　書き込む内容

○想像したこと
　子どもたちに「想像したことを書きなさい」と言っても、何を書いていいか分からない者が多い。そこで、次のような視点で書かせてみる。
・自分が登場人物になりきって、その気持ちを考えたこと。
・登場人物に言いたい・教えてあげたいこと。
・登場人物の言動に、驚いたこと・感心したこと・悲しくなったこと・おかしかったこと・びっくりしたこと・嬉しくなったことなどの自分の気持ち。
○文章表現のよさについて考えたこと
・他の言葉と比べたり、置き換えたり、順番を変えたりして、使われている言葉のよさなどについて考えたこと。
・ここで使われているこの言葉が好きだ、インパクトがある、印象に残る言葉だ、自分の作文に使ってみたいと考えたこと。
・この書きぶりは、読み手を引きつける、自分が文章を書くときの参考にしたいなどと考えたこと。
○自分の考えや生活との比較
・自分の生活と比べて、似ているところ、違うところなどについて考えたこと。
○解釈や評価等
　使用されている言葉や文、話の展開等の書きぶりについて、解釈したり評価したりしたことなどを書き込む。
・なぜこのように書いているのだろうか、筆者の書いた意図や理由を考えたこと。
・作品に使われている言葉の適否を考え、この場面にふさわしい言葉を考えたこと。
・作品に使われている言葉や文、話の展開等の書きぶりについて、作者の他の作品で似たところや異なるところを考えたこと。
・物語の終わり方について不満があり、自分なりの結末を考えたこと。
・このお話のつづきを考えたこと。

三　おわりに

　紙面の都合で、書き込みについて十分言及できなかった。特に、書き込み用紙についても工夫する余地がある。文章の読み取りは、部分だけの読みにとどまらず、部分と部分、部分と全体をつなげた読み取りをしていく必要がある。そのことを考えた書き込み用紙を工夫していくことが大切である。
　文学作品の授業は、話し合いが中心になっているところが多いが、子ども一人一人がしっかりした自分の考えを持って意見交流することで、話し合いが深まってくる。そのためには、自分の考えを作り上げていく「書き込み」の時間をおろそかにしてはいけない。書くことによって考えが深まり、考えが整理されていくのである。

やまもと　みつお　前奈良県国語教育研究会会長。現在、大阪樟蔭女子大学で、小学校の教員を目指す学生に、主に国語科教育法を指導している。